

令和元年度文化庁補助事業



第  
61  
回

# 大 民 俗 芸 能 大 会

北海道・東北  
ブロック

■山形県 林家舞楽

## プログラム

令和元年

10月27日 日

開会 9:30 ▶ 閉会 15:00

会場

やまぎんホール(山形県県民会館)  
山形県山形市七日町3丁目1番23号

入場  
無料

■山形県 谷柏田植踊



- 09:30～10:00 **開会式**  
 ・主催者挨拶  
 ・歓迎の挨拶  
 ・感謝状贈呈  
 ・次期開催県挨拶
- 10:00～10:30 **谷柏田植踊** (山形県山形市)  
 谷柏田植踊保存会・東北文教大学 民俗芸能サークル「舞」
- 10:30～11:00 **アイヌ古式舞踊** (北海道札幌市)  
 札幌ウポポ保存会
- 11:00～11:30 **尾崎獅子(熊)踊** (青森県平川市)  
 尾崎獅子踊保存会
- 11:30～12:00 **切石ささら踊** (秋田県能代市)  
 切石郷土芸術振興会
- 昼休み**
- 13:00～13:30 **早池峰岳流浮田神楽** (岩手県花巻市)  
 早池峰岳流浮田神楽保存会
- 13:30～14:00 **絹谷の獅子舞** (福島県いわき市)  
 絹谷獅子舞保存会
- 14:00～14:30 **塩竈神楽** (宮城県塩竈市)  
 塩竈神楽保存会
- 14:30～15:00 **林家舞楽** (山形県西村山郡河北町)  
 谷地の舞楽保存会

※各民俗芸能の出演時間帯は進行状況により前後する場合があります。



▲出演団体の情報はこちら

ご来場のみなさまへ

- ・上演中はお静かにお願いします。
- ・開演後の会場への出入りは、舞台転換中をお願いします。
- ・ホール客席での飲食はご遠慮ください。
- ・喫煙は、屋外の所定の場所で行います。

## ご挨拶

本日は、第六十一回北海道・東北ブロック民俗芸能大会へお越しいただき、厚くお礼申し上げます。

本大会は、北海道・東北地方に伝承されている民俗芸能の魅力を多くの方々知っていただくとともに、その保存・伝承等に役立てることを目的として、昭和三十四年から七道県の持ち回りにより毎年開催されているものです。

御承知のとおり、民俗芸能は、五穀豊穰や悪魔祓い、鎮魂供養などの様々な祈りと共にそれぞれの土地で生まれ、時代の変遷を経ながら大切に守り伝えられてきました。

特に、「民俗芸能の宝庫」と言われるここ北海道・東北地方においては、演じ継がれてきた歌や舞は、厳しい自然の中で暮らす私たちの祖先にとって、長い間心の拠り所でもあったことは想像に難くありません。

そして今、少子高齢化が進み、地域のコミュニティが様々な課題を抱える近年において、地域に残る文化を学び継承し、人びとをより強く結びつける民俗芸能の果たす役割が改めて見直されており、

こうした中で、北海道・東北地方の個性豊かな民俗芸能が一堂に会する本大会の開催は誠に意義深いものであります。また、今年は今和となって初めての年であります。「人々が美しく心を寄せあうなかで文化が生まれ育つ」という

意味が込められた「令和」の初めに相応しく、本大会が今後の民俗芸能の継承、発展の一助となれば幸いです。会場の皆様方におかれましては、この機会に各地域が誇る民俗芸能を存分に御堪能いただき、先人から伝えられてきた想いや文化に触れていただきたいと存じます。

結びに、本日御出演いただきます各団体の一層の発展をお祈りいたしますとともに、御指導、御支援いただきました文化庁、全国民俗芸能保存振興市町村連盟及び関係機関の皆様感謝を申し上げます。

第六十一回北海道・東北ブロック民俗芸能大会実行委員会委員長

山形県教育委員会教育長 菅間 裕晃

# 谷柏田植踊

やがしわたうえおどり

山形県山形市谷柏

谷柏田植踊保存会 会長 枝松 昭雄

東北文教大学民俗芸能サークル「舞」

部長 遠藤 諒夏

## 一、所在地

山形県山形市谷柏（保存会）、および山形市片谷地（サークル）

## 二、行われている時期と場所

定期公演は、毎年十月上旬の日曜日「東北文教祭」二日目（東北文教大学中庭）、十月下旬の日曜日「南山形地区文化祭」（南山形コミュニティセンター）で行っている。その他、招聘公演として毎年三〜四か所で行っている。

## 三、由来

谷柏田植踊は江戸時代末期頃には踊られていたと考えられるが、明確な記録はない。明治時代には踊られていたと伝えられている。日中戦争や太平洋戦争の時代にあつて、担い手である男性は戦場に送り出されていなくなり、中断の止む無きに至った。

しかし、戦時中も下谷柏の若い娘達によって田植踊りのチームが結成されて練習が続けられていた。この女性だけのチーム

は太平洋戦争が終わって男性が戦場から戻ってきてからも大変活発に続いた。

しかし、時代の経過とともに次第に後継者不足に悩むこととなり、同時に担い手の女性達は高齢化していき、谷柏田植踊は平成に入ってから二十数年間途絶えることになった。

そうしたところに、平成二十八年「東北文教大学・南山形地区創生プロジェクト」が山形県の「未来に伝える山形の宝」登録制度に登録された。その中の取組の一つとして、谷柏田植踊の復活・継承活動が掲げられ、東北文教大学の学生が大学内に民俗芸能サークル「舞」を結成して踊り手となり、地域在住者が唄等囃し手となるコラボレーションが実現した。その結果、残された僅か一本のVHSビデオを頼りに、みごと谷柏田植踊は復活を遂げたのである。

東北文教大学民俗芸能サークル「舞」の活動は、今年度第四期生が担って谷柏田植踊を継承している。学生と地域的一致協力によって、中断した民俗芸能を復活させたことは、希有の事例といえるだろう。

## 四、芸能の構成と内容

中断以前の谷柏田植踊は、次のような八演目と内容から成り

立っていた。

- ①お正月（年頭のめでたさを示す）
  - ②思う人（苗代の上出来を喜んで苗を引く）
  - ③十七かえ（ほめ言葉が出ると返し言葉と同時に踊る）
  - ④そうりのや（稲穂の上出来と豊作を喜ぶ）
  - ⑤やんさのさ（収穫から初摺りの様子）
  - ⑥つんばくら（米の精製の様子）
  - ⑦まいよのえ（米搗の様子）
  - ⑧あながりはか（全作業を終えてお田の神との暇乞い）
- ただし、現在は①②③⑤の演目まで復元しているが、手がかりとなるVHSビデオにはその他の演目が記録されていないので、それ以上の復活は難しい状況にある。

## 五、上演演目の特色

谷柏田植踊は次のような踊り手の役割と特色を持っている。

- ①中太鼓（一人）  
前列中央で中心的存在として動き回る。腹太鼓は打ち鳴らし用ではない。両手のバチは交互に高く掲げて、回転しているかのように巧みに振り回す。片足を上げながら跳躍する軽やかな動きで全体をリードする。
- ②源内棒（二人）  
二人は中太鼓を挟むように位置し、左右対称に男性的にたくましく動く。源内棒を右手に持ちながら、床を突いたり前後左右に大きく振り回す。そのたびに棒の先に付けた鉄輪の音が楽器のように奏でられる。
- ③早乙女（五人）  
後列に位置する早乙女は美しい花笠を被るが、笠から垂れた赤布で顔を隠して神秘的である。あでやかな衣装に身を包み、

両手に扇子やピンザサラを持って演目ごとに持ち替えて、立ち位置を変えずゆっくり優雅に踊る。

## 六、出演者名

### 【大学生】

中太鼓 遠藤 諒夏

源内棒 渋谷 颯汰

早乙女 菅井 梨帆

三浦 麗奈

神尾友佳子

陰太鼓 笹原 捺希

【地域在住者】

唄 伊藤 哲雄

高瀬 勲

情野卯工門

鉦 金沢 英雄

寄せ太鼓 東海林明美

渡辺 正江

ほめ言葉 枝松 昭雄

世話役 中川 藤子

村山 卓

土田 有紗

恒儀 日菜

鳥前 拓也

石井 慶市

福井 隆夫

丹野 裕志

中村 京子

横沢 正巳

中島 愛美

森谷 愛

渡辺千矢子





カムイ「神」への奉納と共存共生を願う感謝の歌と踊り 【国指定重要無形民俗文化財】

# アイヌ古式舞踊

北海道札幌市

札幌ウポポ保存会 会長 藤岡 良子

## 一、所在地

北海道札幌市

## 二、行われている時期と場所

北海道内の各地域において行われる新年を祝う儀式や、新しい鮭を迎えるための儀式、先祖供養、慰霊祭等、時期を問わず必要に応じて屋内外にて踊られる。  
近年では、文化祭等での公演にも積極的に出演し、アイヌ文化への理解促進に努めている。

## 三、由来

アイヌ古式舞踊は、アイヌの伝統文化の中で、祭祀の祝宴やさまざまな行事に際して踊られ、独自の信仰に根ざしている歌舞で、その様式には極めて古態をとどめているものが多い。特に信仰と芸能と生活が密接に結びついているところに特色があり、芸能史的価値が高い。

その内容は祭事のために使うお酒を醸す時に歌われる「杵つき歌」や「ざるこし歌」に合わせて踊る作業歌舞のようなものから、祭祀的性格の強い「剣の舞」「弓の舞」のような儀式舞踊、「鶴の舞」「バツタの舞」のような模擬舞踊、「棒踊り」「盆とり踊り」など娯楽舞踊、さらには「色男の舞」のような即興性を加味した舞踊がある。

北海道内には、国の重要無形民俗文化財の指定を受けたアイヌ古式舞踊を保持する保存会が十七団体あり、それぞれが地域性を活かしながら保存伝承活動を行っている。

そのうちの一つである札幌ウポポ保存会は、古老が残してきたウポポ（歌）やリムセ（踊り）の伝承、保存を目的に設立され、老若男女が会員となって共に技術の向上に励み、後継者の育成にも力を入れている。

## 四、芸能の構成と内容

今回は、弓の舞、鶴の舞などアイヌの代表的な踊りを中心に披露すると共に、アイヌ民族の伝統楽器であるムツクリ（口琴）の演奏を披露する。

## 五、上演演目の特色

### 楽器演奏

ムックリと呼ぶ口琴を口にくわえ、素朴な音色を口腔内で反響させることにより演奏する。雨の音や風の音など自然の中で聞こえる音を表現しており、楽譜はなく心そのまま奏でる。弾く者自身も、聞く者の心を癒す。

### ウポポ、リムセ

動物の動きを表現した「サロルンリムセ（鶴の舞）」、祭事のために使うお酒作りに歌われる「酒作りの歌」作業歌舞、男性の勇壮な踊りが見所の、「クリムセ（弓の舞）」など数曲を演じる。

アイヌの自然観・そして文化を歌と踊りで感じられる歌舞を披露する。

## 六、出演者名

早坂 雅賀 藤岡千代美 早坂 ユカ  
新谷由美子 川上 恵 川上 夏希  
今井 里恵



おさきしし くま おどり  
 尾崎獅子(熊)踊

青森県平川市尾崎

尾崎獅子踊保存会 会長 中嶋 貴憲

一、所在地

青森県平川市尾崎

二、行われている時期と場所

(1) 獅子起こし

農作業を始める前に行く。現在では四月中旬に行っている。この時と、獅子納めには踊らない。

(2) 平川市連合獅子踊保存会による巡回競演

六月に旧平賀町の獅子踊六団体が、獅子踊発表会を毎年持ち回りで開催している。

(3) 猿賀神社大祭奉納県下獅子踊大会

旧八月十四日同神社のヨミヤに行われる同大会に参加している。

(4) 墓踊

古くは、旧八月十六日に十六夜踊として行われていたが、二十年位前から九月初旬の日曜日に行うようになった。

(5) 地蔵様踊

尾崎には地蔵が五カ所に祀られており、それぞれの町内会の老女達を中心となって世話をしており、十月の第一週の金曜日

から日曜日の三日間の夜に地蔵を祀っている小祠の前で行っている。

(6) 獅子納め

収穫後に行く。現在では十月下旬の土曜日に行っている。

(7) その他

新築祝い、通夜や商店等の催事などにも頼まれると行う。

三、由来

藩政期から行われていたと考えられるが、記録等がないため詳細は不明である。

四、芸能の構成と内容

一人立ち三匹獅子であり、雄獅子、中獅子、雌獅子とオカシコ、囃子方は笛、太鼓、手平鉦と唄方で構成されている。

演目は、庭踊、橋踊、山踊の三種類があり、山踊は追込の踊り、瀬踏みの踊り、山入りの踊り、山分け(山掛けともいう)の踊り、注連縄踊、歓喜の踊り、女獅子争いの踊り、狂乱の踊り、和楽の踊り、お暇乞いの踊り、参進の踊りとなっている。

## 五、上演演目の特色

獅子踊は津軽地方に広く分布し、その形態や踊の違いによって熊獅子と鹿獅子とに分けられており、尾崎は熊獅子であり、短角の角で、重厚な踊である。

山踊は、猿面を付けたオカシコが鉦を撥で叩きながら面白おかしく三匹の獅子を三本の笹とヒバの葉で作ったヤマを目指して誘導して行く。

山につくと、雄獅子が危険がないか調べ、安全であることを他の二匹の獅子に教える。中獅子が再度ヤマを偵察し中に入る。オカシコが他の二匹をヤマに誘導し、山に張られた注連縄を解き、三本のヤマをそれぞれが担いで踊る。

その後、中獅子が雄獅子を眠らせ雌獅子を隠す。オカシコが、雄獅子を起こすと雌獅子がいけないのに気づき探し回る。雄獅子が雌獅子を見つけ、中獅子と争う。オカシコが仲裁に入り、和解し踊る。オカシコが先導し里に帰る。

## 六、出演者名

雄獅子	八木橋心弥	中嶋	貴憲
雌獅子	古川 量太		
オカシコ	工藤 隆司		
笛	工藤 彰美	佐藤 運浩	進藤 孝治
鉦	小山内巨樹		
太鼓	八木橋範将	斎藤 憲法	
歌	葛西 幸八	小山内昌祐	
世話役	斎藤 憲法		
	小山内 悟	工藤 範晃	船水 忍



三浦 純一  
三浦 哲哉  
工藤 聖彰

きりいし  
切石ささら踊り  
おどり

秋田県能代市  
二ツ井町切石

切石郷土芸術振興会 会長 工藤 晃

## 一、所在地

秋田県能代市二ツ井町切石

## 二、行われている時期と場所

秋田県能代市二ツ井町切石地区内の数ヶ所で毎年八月十三日、十四日両日午後より行われている。

## 三、由来

口伝によるが、佐竹義宣公が常陸から秋田へ遷封の際、随従してきた道地村の藤原一族の間に踊り伝えられるささら踊りに由来しているとされる。当地に伝わったのはおよそ四百年前のものである。明治期に約二十五年ほど途切れたものの、先人の努力により復活した。現在は踊り手である若勢の減少をおぎなう為に子供達（小学四年生以上男女）にも伝承活動を行っている。

昭和四十年に秋田県無形民俗文化財に指定された。

## 四、芸能の構成と内容

演目には大名行列、獅子舞、奴舞、万歳、棒術がある。舞の勇壮さと拍子のメリハリに特徴がある。盆には切石地区内で、先祖供養と豊作祈願、人びとの楽しみのためとして演じられている。

獅子舞は一人立ち三頭獅子舞で、男獅子、中獅子、女獅子がいる。

奴舞の演目は、まわり奴・十六拍子・桜奴・おどり奴・振奴・綾奴・むじり奴・ちらし奴・田代振奴・綾振り奴・扇奴・すくりさんば・かんむり奴・花奴・流し奴・阿仁拍子・とき奴・さんばさ・さつま奴・山の神・切り奴・諸三拍子・ぶっこみ奴がある。

万歳は太夫才蔵の二人で掛け合いの万歳をおこなう。演目は御国万歳であるが、現在は休止中である。

囃子は笛と太鼓と唄である。棒術はもとは棒使いといい、演目には数種がある。

## 五、上演演目の特色

### 獅子舞

男獅子と中獅子が女獅子を奪い合うという物語を表す。跳躍が激しい。

### 棒術

奴の踊り手が、六尺の棒を持ち相対し、ぶつけ合う。

### 奴舞

揃いの浴衣に鉢巻タスキ姿。踊りの種類によって、扇と綾竹を持つ。身体を大きく使い、勇壮である。

## 六、出演者名

統括	工藤 晃
獅子	畑中 勝弥
	松島 一穂
奴	桜田 大地
	佐藤 久光
	畑中 悟
	佐藤 武嗣
	工藤 隆博
	桜田 春樹
	石山 久敏
	佐藤 友弥
	工藤 牧
	畑中 悟
	佐藤 賢幸
	松島 義文
笛	工藤 晃
唄	畑中 悟
太鼓	佐藤 金弥
世話人	森田 良三



百年以上続く、早池峰岳神楽最後の直弟子神楽【岩手県指定無形民俗文化財】

# 早池峰岳流浮田神楽

岩手県花巻市上浮田

早池峰岳流浮田神楽保存会  
会長 佐々木 孝男

## 一、所在地

岩手県花巻市上浮田四区九八

## 二、行われている時期と場所

一月一日 幸神社元旦祭（花巻市東和町）、門権現  
八月一日 早池峰神社例大祭（花巻市大迫町内川目）  
九月五日 幸神社例大祭（花巻市東和町）  
十二月五日 幸神社年越祭（花巻市東和町）等。  
その他、各種祭や神楽大会、結婚式、新宅祝等。

## 三、由来

東和町浮田集落に伝承される岳流浮田神楽（以下「浮田神楽」という。）の成立は、大正五（一九一六）年とされ、同年二月に早池峰岳神楽（以下「岳神楽」という。昭和五十一（一九七六）年国指定無形民俗文化財・平成二十三（二〇一一）年ユネスコ無形文化遺産登録）から授けられた「奥付書」が保存されている。

## 四、芸能の構成と内容

浮田神楽では、早池峰流の「式舞」「神舞」「女舞」「荒舞」「番楽舞」「狂言」「権現舞」のうち三十二演目を現在伝承している。「権現舞」は特に重要な祈祷の舞とされ、「下舞」とともに最後に舞われる。

神楽の演目を以下に記す。

〈現在の演目〉（平成二十九年）

「権現舞」「下舞」「鳥舞（表・二人舞）」「鳥舞（裏・四人舞）」「翁」「三番叟」「裏三番叟」「八幡舞（表・二人舞）」「八幡舞（裏・四人舞）」「山の神」「岩戸開き（表・五人舞）」「岩戸開き（裏・六人舞）」「松迎」「まね三番」「小山の神」「岩戸開き五人舞」「五穀舞」「女五穀」「水

浮田神楽は、岳神楽の最後の直弟子神楽である。浮田集落の佐々木忠孝氏と阿部藤蔵氏の二人が、鎮守「幸神社」（上浮田）の奉納神楽の確立のために岳神楽に弟子入りし、岳の伊藤巳太郎氏を師匠として、農家の長男であった七名の若者で神楽を始めた。

浮田神楽の成立から一〇〇年以上の年月が経過しているが、岳神楽との師弟関係を基盤に、途絶えることなく神楽を継続している。

神の舞「竜殿」「悪神退治」「尊揃」「天王」「稲田姫」「天降り」「天女」「汐汲み」「注連切」「三韓」「鞍馬の舞」「鐘巻」

神楽を正式に舞う場合は、最初に「打ち鳴らし」という神降ろしの儀式を行う。その後には必ず「式舞」という六番（式六番）を舞うことになっている。この「式舞」が終わると、「神舞」「女舞」「荒舞」「番楽舞」等の中から数番選んで舞い、時には「狂言」も入れる。最後に、「下舞」と「権現舞」を必ず舞うのが早池峰神楽の特徴である。浮田神楽は、岳神楽の演目を舞の形を崩さず習得しており、上記の構成で神楽を行う。

## 五、上演演目の特色

### 山の神舞

「山の神」とは、おたやろみのみこと大山祇命のことで、春は里に降って農業の神となり、秋には山へ帰って山の神様になると言われている。この舞は、山の神の本地を語り、その年の豊作を祈り、悪魔を祓うものである。舞手は、六三の九字を切り、不動心印を結んで、厄を祓い鎮める。

## 六、出演者名

謡	平野 広
舞手	小田島賢志
太鼓	村上 昌美
笛	平野 浩一
手平鉦	日下 公輝
幕内補助	佐々木孝男
	辻 正和
	千葉 文男





古い芸態を確かに受け継ぐ三匹獅子舞と棒術

【福島県指定無形民俗文化財】

# 絹谷きぬやの獅子舞ししまい

福島県いわき市平絹谷

絹谷獅子舞保存会 会長 折笠 東

## 一、所在地

福島県いわき市平絹谷字諏訪作二〇〇番地 諏訪神社

## 二、行われている時期と場所

絹谷の鎮守諏訪神社の秋祭りに、宵祭り和本祭りの二日にわたって境内で行われる。祭日は、戦前までは旧暦七月二十七日であったが、のち新暦十月一日になり、昭和四十七年から新暦九月の最終日曜日になった。

## 三、由来

この獅子舞は、関東地方に起こったと考えられる風流系の三匹獅子舞の系統である。

絹谷の久右衛門が寛延四年（一七五二）に現在のいわき市三和町渡戸高野の住民にあてたと思われる「覚」に、「百（桃）野久次」の名があることから、舞は同市の「渡戸の獅子舞」や双葉郡川内村の「川内の獅子舞」（いずれも県指定）と同じ流

## 四、芸態の構成と内容

獅子は雄獅子・中獅子・雌獅子の三匹で、保存会員の男性が獅子舞を行う。いずれも獅子頭をかぶり、袖口を三角模様染め抜いた紺の着物にたっつけ袴をはき、白手甲、素足で太鼓をつける。原則として初めに雌獅子を舞い、中獅子、雄獅子と進む。ほかに踊り手として、はだしで布面をつけ大団扇と祝い棒を持つ道化役のトウロクが二〜三名いる。

演目は、獅子舞が「花吸いの舞」「狂いの舞」「弓の舞」の三種、棒術は二名が木刀と棒で相対するもので六番ある。最初に棒術二番、次に「花吸いの舞」、再び棒術二番、「狂いの舞」、棒術二番、最後に「弓の舞」を演じる。

「花吸いの舞」は、花籠を前にして雄獅子と中獅子が、その後ろに雌獅子が立って舞い、花籠も巡る。「狂いの舞」は、やはり花籠が立つ。雄獅子と中獅子が争い、最初に雄獅子、次に

れを汲むもので、当地には寛延四年以前に伝来していたと考えられる。なお、獅子の古い太鼓の胴内に「文政九戌年」（一八二六）の銘がある。

県内の獅子舞の中では、本県南会津町の「田島の三匹獅子」とともに、最も古風な芸態で学術的な価値が高い。

中獅子が倒れ、最後に仲直りをするという、「雌獅子奪い」の典型的な芸態である。「弓の舞」は、最初に花籠が立ち、まもなく弓二張と入れ代わる。雄獅子と中獅子が、弓を間にして力強く舞う。

舞庭には、富士山麓での源頼朝の牧狩りを描いた大幕を下げる。これには「天保二辛龍次 卯七月吉辰」(一八三二)と「岩城絹谷村 若者連 泉崎村 染師仁左衛門」とある。なお、これはいわき市指定の有形文化財(工芸品)である。

## 五、上演演目の特色

### 棒術

二名が木刀と棒による棒術を二番演じる。

### 狂いの舞

花籠が二名立つ。雌獅子奪いで、雄獅子、次に中獅子の順で倒れ、最後に仲直りをする。

## 六、出演者名

総括責任者	鈴木 宏一			
提灯	鈴木 滋			
花籠	渡邊 一弘	鈴木 守		
棒	吉田 良平			
太刀	田中 智康			
獅子	高田 真人	渡邊 忍	相川 朋生	
付太鼓	松崎 勝正	(渡邊 忍)		
笛	高田 光一	渡邊 定	後藤 光男	
トウロク	松崎 正義	渡邊 富彦		



お清明  
世話役

渡邊 貴裕  
渡邊 和彦

折笠 東

# 塩竈神楽

しおがまかぐら

宮城県塩竈市

塩竈神楽保存会 会長 鈴木 朝博

を行っている。

## 一、所在地

宮城県塩竈市一森山一番一号 鹽竈神社所在地  
宮城県塩竈市東玉川町二番三十六号 文化財所在地

## 二、行われている時期と場所

主な活動として、鹽竈神社及び市内二カ所の神社の祭礼において神楽を奉納している。

- ・歳旦祭(十二月三十一日～一月一日)
- ・節分祭(二月三日)
- ・花祭り(四月第四日曜日)
- ・御釜神社例祭(七月五日)
- ・みなと祭り(七月海の日)
- ・講社大祭(十月)
- ・新嘗祭(十一月勤労感謝の日)
- ・帆手祭り(三月十日)
- ・お田植祭(五月第二土曜日)
- ・鹽竈神社例祭(七月十日)
- ・祓ヶ崎神社例祭(七月二十七日)
- ・七五三祭(十一月)

この他、福祉施設への慰問、塩竈市高齢者まつりや塩竈市社会教育課の事業への参加等塩竈市が関係するイベント等に随時出演している。また、後継者育成として、塩竈市立第三中学校(郷土芸能部)及び同第三小学校(郷土芸能クラブ部)への指導

## 三、由来

塩竈市は宮城県のほぼ中央、仙台市と日本三景で知られる松島との中間に位置し、奥州一の宮、鹽竈神社の門前町として、また、古くは陸奥の国府多賀城への荷揚げ港として、藩政時代には伊達藩の港として、明治以降は国内有数の港湾都市として発展し栄えてきた。

鹽竈神社は塩竈市の中心部に位置し、東北開拓の守護神として、古代より朝廷を始め地域住民の精神的支えとして信仰され今日に至っている。

本神楽の奉納舞台は鹽竈神社の舞殿で、楼門と東神門の間に位置している。

鹽竈神社における神楽は、延文五年(一三六〇年)の神馬献上の祈願状にはじめてその記録がみられ、このころより神楽が奉納されていたことが窺える。その後も、国府の湊、鹽竈神社の祭礼に参拝する全国の信者が奉納した舞が、様々に形を変えながら神楽として伝わってきたと言われる。

現在の塩竈神楽の型は、明治・大正期にかけて神楽十二段、獅子舞七段とし、現在継承されている「塩竈神楽」が完成された。

昭和五年三月十日、帆手祭り創設二五〇年祭で塩竈神楽が奉納された記録が、宮城県史に掲載されている。保存会は昭和七年に結成され、現在は塩竈市立第三中学校の卒業生を中心とする保存会によって継承されている。

平成二十二年三月一日には、塩竈市無形民俗文化財に指定されている。

平成二十五年には伊勢神宮内宮において、第六十二回式年遷宮の奉祝奉納行事として、「恵比寿大黒舞」「弓取舞」「親子獅子」を奉納した。

#### 四、芸能の構成と内容

塩竈神楽は仙台以南に伝わる十二座神楽の流れを汲むものであるが、太神楽の要素も併せ持つ点が特徴である。

舞には、大きく二つの基本の型があり、その他に獅子舞がある。全て黙劇として進行する。

##### 一、祈祷の舞

基本の舞で、舞台の四方(天下)を清めて、もろもろの安泰を願う舞。

- ・祓いの式
- ・神招舞
- ・幣束舞
- ・弓取舞
- ・三本剣舞
- ・春日舞
- ・雲取舞
- ・伊奘諾命
- ・伊奘冉命舞

##### 二、所作の舞

- ・五穀豊饒、商売繁盛、豊漁祈願の舞。
- ・種蒔舞
- ・鯛釣舞
- ・恵比寿大黒舞

##### 三、獅子舞

- ・悪魔払い、火伏せ、息災延命を祈る舞。
- ・滑稽獅子舞
- ・親子獅子舞
- ・荒獅子舞

獅子は、舞型(演目)によって十三曲あり、基本の舞の曲調は「四方拝」と呼び、「呼び」で始まり「止め」で終わる。

コミカルな調子の曲や、剣舞で乱舞するときなどのテンポの速い曲がある。

#### 五、上演演目の特色

##### 親子獅子舞

上演演目の親子獅子舞は、仲睦まじい親子の獅子に鬼が邪魔をしに出てきて、親子獅子が困っていると鍾馗様が登場し、鬼退治をする。番外の獅子舞で、子供の健やかな成長を願う獅子舞。

#### 六、出演者名

鐘馗	本郷 信弘
親子獅子	渡辺 一彰
子獅子	河田 恵美
鬼	斉藤 浩行
大太鼓	石垣 将浩
小太鼓	渡辺 恵美
笛	作間 夏美
	青砥 ゆか
	菊地 里穂
	手塚 心
摺り鉦	佐々木勝典
指導	鈴木 朝博



はやし け ぶ かく  
**林家舞楽**（三社寺舞楽）

山形県西村山郡  
河北町谷地

楽頭 林 保彦

谷地の舞楽保存会 和田 多聞

一、所在地

山形県西村山郡河北町谷地二二四

二、行われている時期と場所

九月の敬老の日を含む土・日・月曜日 谷地八幡宮  
五月五日 慈恩寺（寒河江市）一切経会  
臨時法会 山寺立石寺

三、由来

林家舞楽由緒によると「同家の祖林越前守政照は、難波天王寺の楽人たりしが貞観二年（八六〇）僧円仁に随従し、後世慈恩寺・のち谷地に往せり。古来山寺、慈恩寺、平塩熊野、谷地八幡等の四社寺の舞楽を司る」とあり、現在は平塩熊野を除く三社寺の舞楽を奉仕している。

聖徳太子に起源する天王寺楽所の楽人は、林、藪、岡、太秦姓東儀の四家に世襲された。その林氏一派が、僧円仁による山寺開

創に付き従って、奥羽の地に我が国に伝来以来直系一系の舞楽が定着した。

江戸の初期頃まで慈恩寺に住居して、山寺、慈恩寺に舞楽の奉仕をし、その後、慈恩寺の門前にあたる大町村に居を移している。八幡宮別当の円福寺の招聘により、舞楽をもって出仕することとなり、以来三社寺の舞楽を司ってきた。

林家は門外不出・一子相伝の家憲を守り、平安時代の中央の楽制改革の影響を受けることなく、本来の祖型を伝承・保存し続けてきた。その稀有で貴重な価値は早くから注目され、昭和二十七年（一九五二）にはすでに国の無形文化財に選定されていたが、同五十六年一月に改めて重要無形民俗文化財に指定された。

四、芸能の構成と内容

舞楽には緩やかに舞う文舞・舞台を縦横に活発に舞う武舞（走り舞）・稚児の舞う童舞の三様があり、一人舞・二人舞・四人舞のものがある。

現在の伝承曲十三曲の構成は、舞を伴う舞楽曲十一曲、振鈴（一人舞）・三台（一人舞）・散手（一人舞）・太平楽（四人舞）・安摩（一人舞）・二の舞（二人舞）・還城楽（童舞）・抜頭（童舞）・陵王（一人舞）・納曾利（二人舞）・軽妻（元服の時にのみ舞う）・着濫聴、廻向楽（舞

はつかない。

## 五、上演演目の特色

振鈴 一人舞 襲装束

三節の構成からなる。古代中国、周の武王が商効の牧野に天神地祇を祀って戦勝を祈った故事にもとづいてつくられた舞といわれる。手に持った鈴を打ち振り、舞台の邪気をはらうといった儀式的な舞である。舞楽演奏の冒頭に必ずこの舞が演奏される。

林家独得の演じ方は、一子相伝であるために一人の舞人が最初は左方の鈴を取って舞い、第二節では同じ舞人が右方の鈴に持ち替えて舞い、第三節では左右両方の鈴二本を併せ握って舞い納めるのが特徴となっている。

陵王 一人舞 裃装束

印度の戒日王の作「龍王の喜び」という歌劇の一節をとった沙羅龍王の舞といわれる。舞の由来となった、中国北斉の人、蘭陵王長恭は容姿端麗であったため、將軍として士気高揚のために常にいかめしい仮面をつけて戦に臨んでいた。ある時、周の大軍を金甌城に破り、その武勇は三軍に轟いたと言う。時に武將たちはこれを喜び、この舞を作ったとされている。

龍頭の面を着け、金色の桴を持ち、紅色の袍に雲竜の裃と金帯を着けて舞う。

谷地の舞楽保存会設立五十周年記念として、中国河北省邯鄲市磁県で確認された「蘭陵王長恭の墓前」において千四百年の時空を越えてこの舞のモデルとされる林家舞楽の公演を行った。

納曾利 一人舞 裃装束

この舞は高麗楽の一つである。雌雄二匹の龍が楽しげに遊び合う姿を舞楽化したものであると伝える。当舞楽では、一子相伝のため一人舞である。「納曾利」は「陵王」の番舞(くみまい)として陵

王の後に舞われる。舞人は曲の前段は片膝を落としながら舞い、舞台中央では着座する。その舞台が古い姿を留めると言われる。最後は曲が軽快な拍子に変わり、舞人はそれに合わせて、両膝を落としながら降台していく。

## 六、出演者名

楽頭 林 保彦

副楽頭 林 重陽

笛 林 一

大場 一夫

鞆鼓 矢作 信行

鉦鼓 高橋 良春

太鼓 竹屋 繁弥

番子 林 雅友

細矢 篤

槇 吉幸

三宅 一生

芦野 孝志

